光

第六十輯

昭和元年十二月

◆一燈園生活について(五)……西田天香

◆薊と菊(エヂンバラ印象記)(下)……岩橋武夫

◆温習會を覗いて……八田かつ三

同人懺悔報恩の奉仕者
祈願不二の光明によれる生活
費用供養されたる淨財

◆昔の日記……みのる生

◆生……松下吉衞

一燈園・宣光社

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆倶成就大圓覺
別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くは常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとよく言辭の學說し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

一燈園生活について

西田天香

五、宣光社

今日は宣光社の事に就て申します、五六年前東京の大學でお話した時一人の博士の方が聞きたいのは宣光社であると言はれた、臺灣の總務長官をしてゐられた某も臺灣で一燈園から興味を起し早く聞き度いのは宣光社であると言つてゐられた。ちようど其の頃は宣光社も色々と復雑な問題を扱つてゐたし訴訟まであつた折なので、『定めしお聞き苦るしう御座いませう』と言ふと『新聞で色々知つてゐるが、あなたが訴訟したのが私には嬉しかつた』と苦勞人だけに一燈園の事が一度でよく解つた様である、聞き度いのは宣光社で、訴訟したので安心した、と言はれる、一人の人は無一物の生活で訴訟した事を善く嚙み分けて、自分をして一燈園生活に興味あらしめた、と言はれたのは私にしては會心の友である。昨年も京城でクリスチャンの集りに各會の長老方が見え鐵道長官の招介で二時間ばかり話させて貰つたことであるが非常に興味を持たれ可成り反響があつた様です、長官も其の折是非宣光社のことも一度聞きたいといふお話であつたが、機會が無く遂その儘になつたのでしたが、此の間滿鐵

本社から再びよばれましての歸りがけにゆつくり話させて貰ひました事でした、丁度日曜でしたので牧師さん方はゐられなかつたのでしたが、有志の方々も大部集られ盛會でした。

斯うした話になりますと初心な方には難かしいかも知れぬが、聞いて貰ひ度い。宣光社は一燈園の一つの重要な部門であり、また難關である、これがうまいこと現れると、大變皆さんもやりよい、現れないと一燈園生活は自分自身にも行詰り他から見ても一燈園生活の効果がはつきりせぬかも知れぬ、そんな意味で大切なものである、一燈園では少し窮屈だから、宣光社へならと、皆さんがよく言ふが寧ろむつかしい、車の兩輪の樣なもので何方を輕じてもならぬ、勿論私の見方は一つのあたりまへの世界の要求によつて二つに表れるまでの事で、嚴密な意味では分けられぬ、箒を持つてゐる時、持つてゐる私が一燈園といふた譯ではなく、當然の要求によつて動いてゐるまでです、私の體は三杯御飯を喰べたらよいのを四杯食べると、何處からが一燈園やら宣光社やら分らぬ、無一物とも勝手に人がつけたので自然法爾の生活では、持つてゐるとも何とも思はぬ、赤兒は玩具を持て遊んでゐるが、神樣のものか赤兒の物かそんな事は知らずにしつくりと法樂してゐる、なら建物は宣光社か一燈園かと問はれる、勿論一燈園の延長だと答へたい、或はまた世の中はそうした風にやつて行けば氣樂でいゝかも知れぬが、世の中には所有權と言ふ樣なものがありなか〳〵復雜である。で結局そうした復雜な所有權の樣なものは欲しい人達に與えて、嫌な事を自然法爾にやつてゆくのが無一物の生活かとい

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

はれる、順縁逆縁によつてお運れがふえ、救はれる。反對に物を預ればどうするかといはれる、圓は逃げてばかりはゐぬ、家でも、子供でも、女房でも、國家でも預る、執着してゐないので何でも預る、それで預る機能が初めて必要になる、自然法爾の生活で預ればあんなになるのだとの表れが宣光社である、宣光社は極めて復雑であるが、皆さんは何うしてもこゝに手を付けねばならぬ、此の世で御奉公するには此處まで手を付けねば貧弱である。

フランシスカンの中に、サードオーグー(Third Order)、と言ふのがあるがこれは宣光社の事らしい、在家に對する敎へは何れの宗旨もあるが、くはしい確かな敎へはない。在家は金を儲けて寺や敎會へ持つて行く様に敎へられる、今の世は在家はそれでやり切れぬ、在家の生活の整理をせねば有難がらぬ、といつて寺院は又それは手も足も出ず、眞面目にやつたらよからう位のところで片付ける、そこに宣光社の使命がある、傳統的に家に生れた子供は親を養ひ附き合をせねばならぬ、信心修養は第二段、そこへ文化が流れて贅澤を敎へる、ガソリンのいる飛行機や自動車を使つてそれが四億何千萬圓いるといふ、こんなことに追はれて多額の計上となる、是が娑婆浮世といふ、宣光社は一燈園で整理をして建てる、自らは要らないといふ土臺の上に築き上げて、そして預ればかう、整理すればかう、といふ事になつて内容が普通の生活とは違つて來る、宣光社の一番の生命である、もしたゞの生活からやらうとすると、よほどの困難であります。

次は第一宣光社の事について話させて貰ひます、聖書の中に、「人若し汝の左の頬を打たば右の頬をも此れにめぐらせよ」といひ、また姦通した人妻を連れてキリストに裁きを求めた時、「十字架にかゝり七度人を赦せ」、といつてある、けれどもまた一方にはこうしたことが書いてある、盛んなエルサレムのお祭に詣でた時、境内で商をしてゐた豆屋や、兩替屋の店を蹴散らして、「我が父を惡商の店にしてはならぬ」を怒喝したと、そこに矛盾があるではないかといはれる人がある、私は矛盾してはゐないと思ふ、キリスト自身の體を何う處分するかといふ時は十字架にのせてもよい、「彼等は爲すことを知らざればなり」といつて十字架にのつたキリストは「われ已に世に克てり」といつてゐる、決してキリストは死んではゐぬ、そこまで救はれない人を前にならべた時、救はれ度いと願ふ道程の人々にはたから迫害する時、道を求めて來る人を護りたい、神の道をゆくものと、そしてまた邪魔するものとを護りたいのは當然である、他に人がゐたらその人がやつたらおだやかである。豆賣りの屋臺を潰したこと、一人の身で二人の仕事をする故誤解されたのである、お寺のとなりの地主は寺の屋敷をへらす、和尚はよう知つてゐる、けれども和尚が言ふと、おつさんきたない事を言ふとなる、檀家でいふとよいが、和尚が言ふと妙なものになる。

中桐さんが福島で代議士の候補に立つた時、友人が何もしないでもよい、只だハイと受けて呉れと賴む、中桐さんは承知したが、講演に行かねばならぬ事になつた、選擧に於て政事的訓練をしような

ど言ふて自分を助けよとはいはぬ、傍が承知せぬ、だが私にも賴みに來る、すると天香は托鉢を賄賂にするといふ、宣光社のやりにくい事そこにある。反對黨からは惡くいはれる、社會主義とか革命せんとするとか、色々にいはれる、新聞記者は「一燈園は投票を買收するか」と問ふそんな事はない、しかし宣光社はよい事の爲なら働くことがある「いざといふ場合投票買收するか」と、やつてゐる樣にいふ、そこが研究問題になる、一票か二票買收してこの人が出、またそれが全體の利益と思はるれば買收する、しかし自首する、狹い範圍で掟はつきりしてゐる、私は惡い事ではないと思ふ、所作は惡いが一切の爲なら罪を自分が負ふ、しかし一燈園は此は出來ぬ、片寄つた往方は眞俗二諦ではない。

九州に一人の魚屋があつた、夏でも一荷になる程の魚を問屋で買ひ裏棚へ持つて行く、そして魚はその儘にして置いて、集るかみさん達を相手に早速有難い話を始める、話が濟むと皆で各々分けて買つて歸る、斯うした生活をしてゐるが元手と手間がかゝつてゐるので何年かゝつても增えもせぬがまた減りもしない、殊に夏は魚が腐るので干物を持つて來いといはれる、で早速干物を仕入て行くといふ有樣、魚屋は話す事が面白く、客もありがたく聞く、高い安いは問題にせぬ、嫌な氣持は少しもない、普通と違ふところは判つきりと出てゐる、また四國詣りをゐたしますと、札所札所には大抵わらじが置いてある、欲しい人は二錢置いて一つ貰つてゆく事になつてゐる、別に店番はないが、勘定が間違ふやうな事はないそうである、商賣としても決して嫌らしい感じを與へない。

臺灣の松本さんもまた變つた方法で溫泉を經營してゐられる、浴場の入口に賽錢函がある、自由に湯に入り遊むで歸る、這入るを托鉢者が「入らつしやい」とよい氣持で第一宣光社の交渉が始まる、何の人が何程入れたやら薩張り分らないが、開けて見るとある、浴場もたつてゆく、それを延長するとやれるのである、以前河道屋でもよく宣光社の話が出た、うどん屋を宣光社でやつたら面白からう、しかし潰れやうなどと話したことである、白木屋などでも時々そうした話が出る、「宿屋を一燈園でやつたら潰れるだらう」といはれる、私は潰れはせぬといつもいふことである、一燈園はいつも人樣を宿めるが決して損をしてはをらぬ、儲けたいと考へなくても潰れぬ、見樣では一つの宣光社である。

柳馬場の通に古い寺がある、柳の道場といふ額がかゝつてゐる、昔はまだ加茂川が廣くて、今の柳の馬場はその頃の堤防であつたらしい、そしてそこにずつと柳が植ゑてあつたので、それ以後柳馬場といふ樣になつたやうである、丁度その頃叡山を下られた蓮如上人が念佛の行者となり、此處に道場を作られた、そして集る人達に有難い話をされ傍ら餅菓子などを商はれた、もともと法恩の爲に設けられたので遂をはりには寺になつた、それを柳の下の道場といはれたらしい、始めは極く緣の少さいものであつたらしい、そして念佛が主であつた樣である、儲けやうとしたら檀家は四分五裂になつたかも知れぬ、こんな風な商賣は宣光社である、一つの體で二つの仕事をして障りないのを第一宣光社と言ふ、嚴密にいへば御飯も三杯まで一燈園で一杯は宣光社である、ワシントンが已を得ず戰端を開

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

いた時、クエーカーの信者は此に應じなかつた、どうぞ戰爭をしないで祈つて下さいと政府に歎願したクエーカーの信者は一燈園でワシントンは宣光社である。

ウィルソンがまた何かの時に言はれた言葉の中に「政事は手前に屬する弊害を除き國民を善い人物に仕立る事である、國を建てる事は後でよい、人物を先づ仕立る事である」と言つてゐられる、誠によく穿つた言葉であると思ふ。

信心を第一にした店は決して潰れない、有難い話をした魚屋は宣光社である、預つてゐる國民を神の子として國土を淨土にすること、宣光社の使命はそこに在る、第一宣光社の眼目は神代の理想を實現する事である、其の次に始めて軍備が許されるかもしれぬ、斯る立派な國を破壞しやうとするものを膺懲する事は許されやう。國に怖れなくして軍備をするなら爭奪の爲だから地獄となる、戰では守る當體を護り、人格を養成する、これを害するものと戰ふ事はゆるされる、これは宣光社である、現代に於ては何が善いかゞ分らぬ、何うする事が自然であるのかも分らぬ、如何なるが是れ第一義か分つてをらぬ、分つたらしいものが集つた所で天國は實現せぬ、間違つたものは必ず行詰る、眞實の生活を知らないからである、魚屋の脈を傳ふ事になる。一度踏み迷ふたら寂しくなる、園の生活に這入つてゐたら何でもない、いつも結婚の時に言ふ事である、嚴密にいふと結婚したいと言ふてはいかぬ、したいといふと其處に誤りがある、許されたらと言ふ可きである、しかし結婚の事はなか〳〵そうゆかぬ、たいの次に又たいが出る、そんな要求が出るとむつかしくなる、眞俗二諦がうまく現れるか否かの境目である、自分獨り身の時は氣樂だけれども、女房を持つと矢張り一人でやる樣な譯にはゆか

ぬだらうなぞいはれることがある、しかし私は死といふ事をいつも思ふ、女房も亭主も死の前には執着はない、いやでない女房でなければならぬ事はない、結婚といふ事について思ひ出すが前はよく二人で路頭に出て貰つてゐた、九州の柳原さんの時にもトボ〳〵と出た、家のないのに困りはしないその時伊藤猛さんの世話になつた、どうしたいと思はないでもよい、したいと思ふ時に家賃も入る、大きな生活が小さくも見える、家庭持つ生活で徹底せねば此の生活は切れてゆかぬ一燈園も宣光社も現はれては來ぬ。

だいぶ前からの話がゝりであつた布哇行きの事も、漸く此の度よせて頂ける事になつた、色々な因縁で家内もゆく。布哇からは一等船客の旅費として六百圓來てゐる、一等船客といふと何だか晴がましい樣でもあるので、郵船の社長さんにいふてやつたら、それでないと上陸が難かしからうとの返事であつたので、已むなく一等で行く事にした、しかし六百圓から旅費を差引いたら上陸出來るだけで、一厘もあとには殘らない、勞働者でも五十圓の見せ金が入るに、私はひとつもなしで行く、歸れねば歸らぬ、歸さるれば歸る、どうしたいと思はぬ、布哇まで行きつく金しか無いのは淋しいやうだが、生かされるだけ生きる、後はお光まかせ、廻らせたい人は廻らして吳れられる。

命がけなら不自由せぬ、手を出すと困る、ゆるされて預る、魚屋でも、柳の馬場の道場でもゆるされる範圍でやるから延びる、此の頃伏見の會社へ托鉢に行つて貰つてゐるがこゝは宣光社は一寸と複雜な樣である、又滿洲の愛川村で山崎さんが主任でやつてゐられる農村は、曾ては在所が立たぬといふことで關東廳も問題にしてゐた所である、在所の人達の評判を聞く、一燈園は結構だといふ、重寶だ

といふ、便利だといはれる、もう一人欲しいといはれる、だが眞似でもしやうとする人はゐぬ、民政署も始めは心配して一戸分預けられ宣光社をやる事にした、土地は五町歩程預つた、私は滿洲で殘つた金を光の郷の金として持つてゐたが歸りに此處へ送つた、一戸分やつてゐると色々行詰る、また在所で反對した一人が偶然大連で世話した人であつた、その人のいはれるには一燈園は此の村を潰すといはれる、大連で話をさせて貰つて宿つた翌朝のことお寺の住職が來られて「夜前のお話の時或る婦人がゐましたが、その方の主人が來て、園の集りのやうな集りに寺を貸すやうなら寺を燒いて了ふ」といつて來たといはれる、よく聞いて見ると此の人は寺の出來る時千圓寄附した人だそうである、うまいごと千圓だけ燒いてゆけばよいが、でないと大變ですなといつた事でした、なほ住職のいはれるには、天香と住職に膝詰談判をするといつてゐられたとか、早速私から電話を掛けて出かけて行つたのでした、そうした背後にはいつも間違つた觀測や風評が交錯して系を引いてゐる樣である、常りさへすれば問題は解ける。

愛川村のことについても苦力に手間賃を現金で渡すから皆そこへ行く、それで困るといふ、行つて見るそれも皆な嘘である、山崎さんが一戸分持つて成功したら、自分達の怠けたのが分るので、何とかして出せるものなら出して了ひたい、そして小錢でも出來たら國へでも歸らうといふ算だんらしい。あまり酷いからやめる事にしませうか、淨財だから構ひませぬでせうといはれる、淨財ゆへ無暗なこ

とは出來ぬといつたことでした、その內に大連の人もよく了解した、住職も又寺をやめて園へ來やうなぞいふ、光はいろ〳〵の作用をする、そうして時々誤解もされるが、苦力さんにはいつも喜ばれてゐる。『眞實にあなた方は神樣の樣な人だ』と朴訥な口を衝いて出る言葉には思はず頭が下る。

村に托鉢をしてゐる時は結構だといはれる、一戶でも持つと敵となる、生やさしい事ではゆかぬ、國民が神の子でも全部理想化するまでは、兵備がゐる、正しく預る爲には膺懲の軍が要る。

一燈園の人は困るといふ、なぜですと聞けば、來たら鍋の蓋まで開けて見るといふ、山崎さんの曰くに『飯たいて呉れといはれるから蓋位取る』と鍋の蓋まで取る程馴染みゆるしたのが、反對になるとこんな事になる、たくさん托鉢して少しの宣光社の營みはやすいが、なか〳〵油斷はならぬ、眞俗二諦と口ではいふが、生やさしい事では救はれぬ、結局此の世は仕方がないのだと其の儘にしてゐると、資本主義の奴隷となる、やさしい人は負ける、これではならぬと氣の付いた人は園なぞへ來る、ちよつと奴隷的な感じもするが、結局こゝなら落付ける、何をするにしても少しは金が入る、だが手が出るとソレとやられる、叮嚀に頭は下るが魂は賣らぬ、道を侮辱する時だけは判つきりとさしたい、跣足や、野宿などゝやさしい事許りは見せぬ、喜こんで暮せる事實を見せさして貰ふてゐる、大きな家庭を持つて混雜するより、二人連れで遍路もする氣持を以つてやつてゐる、內容は無所有無一物、たいとはいはぬゆるされたらといふ。燈影塾も宣光社の仕事の試み、色々と問題も殘されてゐる。製

箱の方は足らぬ事はない、裁縫部の人からは返事に困る事をいはれてゐる、それはたゞの生活と宣光社との違いからである。今の先生の前にゐられた某さんは、以前田舍から出て來た娘さんをお弟子に持つてゐた、或る晩のことその娘さんは遂晝の疲れの爲に居眠つて、高貴な着物を燒鏝で燒いて了つた、百五十圓辨償といふ事になつたので先生も大變怒つた、娘さんは國へ歸ると言つて途中で自殺して了つた、儲けたい儲けたいと思つてゐたので遂無理してこんな結果になつたのである。先生も大變これを問題にして園にこられたのでした。

儲けやうと思ひしくじり、儲けいでもよいとしても不景氣はしらぬ、おだやかにこんな事いふて、聞く人に損を掛けず通す、此の脈を擴げると、經濟生活の問題も解ける。

私の知人に門間さんといふお金持がある、懺悔の生活を讀んで營業方針を一變し、別莊を解放して店の人に住はせ、食堂を一所にして、といふ風に總てを改められたので、其の年の商賣にしてゐられる醬油の賣上げは、例年の三倍あつたそうである。よそは不景氣なのに、掛倒れもない、儲けを中心にせずお光を中心にすると不思議な事實が現れる、こんな事實はよく世間でも見る、名付ければ一燈園ではなく、宣光社である、唯物史觀を理想とするものに劣らない、國を宣光社は現成する事が出來る、如何なる難問題も許されたら預らう、そして懺悔の生活をする事、私が惡かつたとこれを反省する事を怠らねば百人は百人、十年は十年の働が生れる、此意味で托鉢が重大なのと同じく宣光社の

經營が必要である。

お光に養はれる事に就て、減るものを喰はせぬ樣に、それを喰べるのは淨財でない、減つたと思ふとそれだけ執着が起る、あなたが此處にゐて呉れたので家も潰れずに濟んだとよくいはれる、其處の人は今まで金の力で働いて來たのである、贅澤しなくなつた、そこのもの喰つたのも減らした事にはならぬ、それなら常に行つてゐても損ではない、心が淸まり、淸まらねば働いても兎や角いふ、働かないでも喜こばれる、そう出來た女房を持ち亭主を持つてゆけば何處へ行つても喜ばれる。

要するにお光の生涯がいつの間にやら二つに分れる、預つたら何うするかの爲に宣光社が必要になる、二つをやると複雜になるが許されたらやらせて貰ふ、これが第一宣光社である。魚屋や燈影塾の事も此の部類に屬する、數量は上らいでも行詰らぬ、政府が、國の人々が皆お光の子となる理想なら如何なる迫害に對しても恐れる事はない。

キリストが神の道を學ぶ爲の場所エルサレムで「我が父を惡商の店にすな」と怒喝したのも、よく其の邊の消息を物語つてゐる、人がそんな事してゐるとて批判してはならぬ、その內容を見ねばならぬのである、丁度車の兩輪の樣に一つから二つに現れる、皆衆生の要求である、ひつくるめて自然法爾の現れである、女房持ちながら子持ちながら、賴まれたら預るのである。——一燈園に於ける講話筆記——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

薊と菊（承前）

（エヂンバラ印象記）

エヂンバラにて　岩橋武夫

斯くして私はエヂンバラの人となつたのであつた。渡る可き人生の海には、和な日ばかりではない嵐もあれば雨も降る。然し其等は、信仰の前には餘りに小さ過ぎる。私の日本友人の一人は、約束の送金を果さなかつた。此の事件は、異國に於ける我等夫婦に取つて、かなりに甚大な打擊であつたが、然し信仰のある處必ずや道は開ける。幸ひ我々には其れを試練とし、十字架とし、感謝として受け容れる心の用意があつた。

『生死を越へた光りの故鄕を
忘れずにする旅ぞ幸なり。

いかにせばやとおもふとき神ありて
みちひかるものそ深山のたびは。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

その時にそこにそのまゝ誠あらば
おそるべきものほかにはあらじ。』

天香氏が、我々への餞別にと書かれた句である。ミルトンも歌つた。

『神の優しき軛を最もよく擔ひ得るものは、最もよく神に仕へ得るものだ』

と、此の言葉が鮮かに我々の體驗に現はれる時、云ひつくせぬ感謝が心靈に滿ちわたる。唇にあらずして、生活に於て生きねばならぬ宗敎の眞意義が、ます〳〵明瞭となつて來る。惠まれたことには、我々が信仰の道を失ふには、餘りに大きな援助者を持つてゐた。其れは天にあるばかりでなく、凡ての地上にある——日本のみならずオーストラリヤ、アメリカ、英國いや此のエヂンバラに。斯うして『無一物中無盡藏』と云ふ言葉の深い意義が、我々の小さな生活を通じてます〳〵光つて行く。友人ブレイルスフォード氏のクエーカーであると云ふ因緣が、エヂンバラへ來てからも、私を當地同敎徒の團體へと伴れて行つた。ブレイスフォード氏がアメリカの週刊宗敎雜誌『ユニティー』に掲げた私の小傳記を通し、色んな友人も他に增えた。次に此れ等の人々に就て少しく述べて見やう。

私は先づクエーカーの友人から始める。トルストイが云つた樣に、信仰は光りを探ねて行くに等しい。其れは先づ、個人銘々の問題である。だからして始めから團體や宗派があつた譯ではない。光りへ〳〵と探ね求めて行つた人々が、期せずして一つの光の源に集合し、其處に始めて團體となり、宗

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

派となつたのである。から云つた意味で元始キリスト教を近世に示現しながら、クエーカーの團體が成立してゐる。大教會の禮拜よりも、私は此の單純沈默な、奧底に何物かを祕めてゐる樣な『友の集り』の方に引きつけられる。そして其處に漲つた靈的の合一と、純眞な人間愛をしみ〴〵と味はされる。當地の小さな團體のメンバーは、眞實お互を兄弟とし、姉妹として恰も一家族の觀をなしている。當大學醫科の講師である若いメインランド氏は、多忙しい研究の時間を割いて、私に六ケ敷哲學書を讀んで呉れる。音樂家のミス、ドッツは親身の姉の樣にして、此れはまた變りない友誼の所有者であるミス、ロッブと共に、色々な女らしい日常の心盡しを示して呉れる。前記ミス、ドッツ家には今年八十三の老母がゐて、一週に二回づゝ此れ又親切に讀書して呉れる。私が庭に面したパーラーで、老母と何か文學の讀書を樂しんでゐると、表の客間では、妻に英語を敎へやうとわざ〳〵同じ時間に其處へ來て呉れる、若いミス、ゴールドが妻に會話の手解きをしてゐる。二階では、ミス、ドッツの彈くピヤノの緩やかな旋律が流れる。何んと云ふ美しい人生の姿であらう――私の目は微かに涙ぐむ。其老母と私達夫妻は、つい先き頃迄ペンケイトランドの田舍で樂しいホリデイを送つて來たのであつた。ミス、ロッブはマレイ、ハウス、ホステルの管理者で、私達はよく其處の晩餐やお茶に招かれた。そしてある時は、前記一燈園や天香氏に就て、在舍の女學生達に講話を試みたものであつた。今我々は、他の友人ファーラー氏の宅に滯留し此れを書いてゐるのである。同氏はワットソン、スクールで

地理を敎へる人、今家族を伴ひ、田舍へ消夏中であるが、其の留守宅には下女と我々との三人、他に猫三疋と云つた靜けさ。それにしてもかうした開放振りは、何んと云ふ暖い信賴に滿ちたものであらう。異國人たる我々は、恰も肉身の兄弟の家を訪れた時の樣にして、美しい客間の中に、アット、ホームな心持で起臥してゐる。最後に私は、ラッドラム博士のことを書き忘れてはならない。博士は當大學にて化學を講ずる人、今はケンブリッヂの舊家へ消夏中であるが、今月(九月)末には當地に歸來され、新學期開講後は、其の邸宅に於て我々は居住を共にすることゝなつてゐる。此の一事を推しても、同博士の我々に對する友誼が如何ばかり大なるかを想像されることが出來やう。其の深く美しい愛情の思ひ出は永遠に輝き我々の心を希望の光りに包んで吳れることであらう。玆に心からの感謝と敬意を捧げる。

以上述べたクエーカーの友人以外にも、幸ひな我々は多くの美しい心の友を持つてゐる。其れ等の人々の厚意を思ひ出すことは、實に樂しいことである『印度學生の母』として隱れた獻身的な仕事に弛まない、ミス、ブルーンがカリントンに住んでゐる。我々はよく其の廣い庭園を彷徨ひ、故國の空を懷しむのである。妻の英語を敎へるミス、ゴールドを送つて吳れたのも、此の人である。妻が『お母さんの樣だ』と口癖にするのも、其の人かドッツの老母のことである。其の人の友人のミス、ウェダスブン——此の人は又『支那學生の母』と呼ばれてゐる。每週金曜日にはお茶に招かれ、二三時間

の讀書を共に樂しむのが習はしである。其の他ミス、ビルビーの名を忘れてはならない。日本贔負で高倉と云ふ今東京神學校の校長をしてゐる方が、よく其の家を訪れて世話になられたこともあると云ふ。今もエヂンバラにゐる二三の日本留學生が集つては、快談する場所の一つである。此の他に救世軍の人々がある。本年一月山室軍平氏が當市訪問の際、同氏を通じて熟懇となつたウイリヤムス大佐夫妻、並に同夫妻を介しての士官達がある。私は當市の主なる救世軍の集會所に於て、數回自分の信仰に就て話した。ある時は救世軍經營の勞働者宿泊所に於て講話を賴まれることもあつた。救世軍以外にも、二三の教會及び會合に於て、私は講演を所望された。又在スコットランド大學キリスト教學生聯合の總會が本年の春ルー（スコットランド西海岸の）に於て開催された節、我々は招待され同席上にて『日本キリスト教史』に就き講演したこともあつた。或は當市美術學校に於て『日本藝術』及び『一燈園の問題』に就て話を試みたが、かう云つた各種の講演が機會となつて、多くの若い友人達が、私達の周圍を明るくさせて呉れた。然し斯かる美しい好印象は、必ずしも相知の友人間にのみ限られた譯ではない。未知の老若男女が何んとなく我々に對し、笑ひかけてゐる樣な親しみを經驗する。街の通りでも店屋でも、電車の中でも皆んなさうである。道を尋ねた子供迄が、心からの親切を示して呉れる。プリンセス通りの雜沓の中を行く時など、不意に手を握つて話しかける老人に出逢ふ。時とするとそつと帽子に手を觸れて、默禮し乍ら側を通り過ぎる紳士もある。かう云つた我々とエヂン

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

バラの人々との蟠り無い親しみを知らうとされるならば、我々が前に住んでゐた、サウス、クラーク通りの附近にあるパン屋や八百屋、其の他の食料店の店の誰れ彼に私語きを交されても分る事だらう。と云ふのは、雨の日も風の日も大學からの歸途本を抱えた私が、店員と冗談を云ひ乍らよく其れ等の店から或る時はポテト、或る時はパンの袋を提げた妻に手を引かれて出て來たものであるから。

いや私はこんな印象の一つを書いて見やう。其れはインターナショナル、クラグのはねた寒い吹雪の夜であつた。もう十二時近く通りの人足も稀で、電車に乘つてゐた我々は寒さに震えてゐた。妻は下車する停留所を見逃すまいと、車窓から頻に外を眺めてゐたのであつたが、猛り立つた吹雪はやゝもすると其の眼界を遮つて仕舞ふ。『此の邊だ』と妻が云ふ。見えない私にも、乘車時間から其れと想像はつくが、さりとて確かに其處だとは云ひ兼ねる『普通の夜ならよいが、此の吹雪では下りそこねると大變だ』と我々は多少困陋の體であつた。すると突然車掌がやつて來て『次があなた方の下車するストップです』とニコ〳〵注意をして呉れる。我々は面喰つた。聞けば私達が二三度其の車掌の車に乘つて、其處で下車したのを記憶してゐたのであるとか。『サンク、ユー、ソー、マッチ』と厚く感謝して電車を下りやうとすると、其の車掌は私の足許を案じてか腕を捕へて吹雪もかまはず線路を横切り、向側の歩道へと渡し、丁度停留所前に在る我々の住家の戸口を開けて『グッドナイト』と握手して電車へと驅け戻つた。振り返つて見ると、我々の乘り捨てた電車の後には、三臺の電車が靜かに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

待つてゐた。私は云ひ方ない喜びを感じた。別に其の車掌が送つて呉れなくとも、無事に歸り得る僅かの道ではあるが、其の美しい人情の發露の前には思はず頭が下つた。かう云つた厚意の動機には、何物にも代へ難い價値が輝く。私はつく〴〵と思ふ『若しや斯る心持を持つて一切の社會問題が整理されるならば、如何なる復雜難解の問題も、太陽の前の氷の如く容易に解け得るだらうに』と當市が盲人に對して電車の無賃乘車券を發行してゐる事を思ふ時、無賃の私に對する車掌の上述の態度は、算盤勘定を超越したものであらねばならない。又私としても無賃であるが故に、此の車掌の美擧を誇大に賞讃した譯でもない。成る程經濟活動は人生の重要な一部を占めてゐる、だが決して全部であり得ない。そして最後に、人生は其れを超越しなければならないものだ。兎に角其の夜の出來事は忘れ難いものゝ一つである。

此の印象記に筆を下し始めたのは今朝の八時からであつたが、此處迄書いて來ると、もう私の窓には靜かな夜が帳を深く下して仕舞つた。黃昏前暫らく妻と共に、此の家の裏手にある行き馴れたアーサー、シーツ（街の東端にある有名な公園の在る山）の邊を逍遙して來たのであつたが、早や空模樣がすつかり變つたことに氣づかされた。吹く風にさら〳〵と流れ行く枯葉の音も淋しい。變り易い天候は、今晴れてゐたと思へばバラ〳〵と時雨れる。廣い芝生に草を食む羊の聲迄が枯々て來た。もう私は冬の足音を手近に聞く樣な氣がする。靜寂な此邊は、今まだ十時だと云ふのに眞夜中の樣な感じ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

を與へる。私の點字を突く音が、ストーブの上の大理石の棚に載つてゐる置時計の音と、面白く調子を合せ響いてゐる。何處となくうら寒い。遠くの方で犬の吠へる聲が聞える『日本でなら初冬の十二月を思はせる陽氣だ』と私は自分に云つてみる。もう私の机上には、二十枚餘りの原稿が書き上げられてある。書く手を一寸止めた私は、心の內にかう考へた『此れを當地で發表すると共に、日本の方へも送つて故國の人々に讀んで貰ふことにしやう。云ひふらされた言葉だが(國民の外交)と云ふ樣な意味からしても、かう云つた私の美しいエヂンバラの印象は、何等かの好感と省察に價ひするだらうから』……私は更に書き續ける。最近當地に於て開催された第十八回世界エスペラント大會で、我々エスペラントの同志が、如實に實感したのは實にかう云つた國民的外交の好感であつた。將來の國際問題や社會的事業、其の他人類共同の文化的運動に於て、我々が渴求する處のものは實に其の好感を基礎づけてゐる平等と平和、人類愛の理想であらねばならない。斯る意味からしても、エスペラント大會がエヂンバラに於て催されたと云ふ事は、私の印象をして尙思ひ出多きものたらしめたのである。

安息日の朝敎會の鐘が鳴り出す頃、我々の姿は何時もあの大きなセント、ジャイル寺院の前からマウンドを通り抜け、廣いプリンセスの通りへと下りて行く。其れは寒い氷雨が降らうと、深い霧の日であらうと、街路樹に若々しい春芽がのびて何處となく乳色の靄がこめる日であらうと、夏らしくくつきり晴れた、でも特有の强い風の吹く日であらうと、日曜の朝でさへあれば、我々の足は略同じ時

間に同じ場所を、カレドニヤン、ステイションの前に在る、クエーカーの集會場へと急ぐのであつた。我々はあの四季とり〴〵の草花に飾られた廣い公園を左手にプリンセスの街道を歩るいて行く時の氣持が一番に好きである。丸で御伽噺の國にでもある樣な古い城が斷崖の上に聳へ、其の昔湖だつたと云ふ廣い谷間をば、年中青々とした芝生が被ふてゐる。道行く人々の姿や顏附きにも、今日ばかりは敬虔な落ちつきが窺はれる。街路樹を通して伽藍の丸い屋根が見えるセント、カスバートの寺院からは、高低のリズムを以て、大小いくつかの鐘が亂れ打ちの快調を響かせて來る。と、丸で其れにベースを附ける樣に岡の上の王冠チヤートチからは、太い底力ある低音の鐘が、靜かな餘音を以て鳴り響く。耳を澄すと、谷や街を越えた遠近の教會からも、色んな鐘の音が幽かに響いて來る。紫色の太陽の光りが雲間からさつと輝く。何んと云ふすが〴〵しい聖日の光景であらう。一切が神の讃美を象徴してゐる。街も人も自然も、私には凡てが幻に見る神の教會其のものである樣な氣がする。地上の憂や悩みのあとは消え果てゝ、たゞ魂のみが永遠の翼を張つて飛躍するとしか思えない。私の宗敎的感激はかうして奔放な自由を獲得する。同じ感じがして、妻も私の手をとつたまゝ默々と歩いてゐる。私は涙ぐんでゐる自分をよく見出すのであつた。そして此れが眞のエヂンバラ、いな人間の聖なる世界であれかしと祈るのであつた。然しかう云ふ心靈の飛躍も、理性のさゝやきに依つて、現實の世相へと伴れ戻られる。そしてこんな聲を私は聞く『如何にもお前の魂は、今世界と創造者の前に純潔であつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

た。然し乍ら現實はお前に教へる、肉はお前にさゝやく。考へて見るがよい、お前は天使では無いのだ。お前は罪と惡に必然に運命づけられてゐる人間なのだ。肉の中に閉ぢ込められた天使なのだ。現實はお前に教へる。此のエヂンバラだつて今お前が想像した樣なものばかりではない、他の一面があるのだ。近代化し物質化し樣としてゐるのだ。文明の汚毒が矢弛り此處にも根を下ろさうとしてゐる。お前の知らない處に、明るい夜の街、歡樂の巷もあるのだ。其れがエヂンバラなのだ、そして其れが又人生なのだ』私は其の聲を打消し、もう一度前の靈的歡喜を取り戻さうと靜かに祈る。すると、ジヨン、ノックスの熱情に燃えたスコットランドが現はれて來る。ホワイト博士の祈りに滿ちたエヂンバラが浮び上る。チャーマース博士の宗教的良心に燃えた教會の俤が偲ばれて來る。そして私は眞に人類の爲に心靈の鐘が高々しく此處から世界へと鳴り出して欲しいと、心から訴へたくなる。成る程其處には人間性の醜さと、罪を暴露した處もあるかも知れないが、私の愛する眞のエヂンバラは、私に印象された美しい其のものであることを希ふ、又さふである事を信じたい『汝のバイロンを閉ぢて汝のゲーテを開け』と叫んだカーライルの見えない聲は、尙聖日に聞くあの靜かな教會の鐘の中に、強く餘音を殘してゐるとしか思えない。私の第二の故鄉と云ひたい此のエヂンバラが、人類の理想の街である爲に、もう一度お互がカーライルの言葉を心に刻み附けやうではないか。そして私は永遠のエルサレムである爲に、此のエゲンバラの健な成長を祈るものである。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

元來私が此のエヂンバラを研學の地と定めたに就ては、二つの主な理由があつたのである。其の一つは此の古典的な街に對する宗教上の憧れから、他の一つは、其の大學が、私の專ら研究しやうとした哲學に於て、高い名聲を持つてゐることであつた。第一の理由が如何に私を滿足させたかは、以上述べ來つた處に照し合しても明な事と信ずる。第二の理由も、過去一年に於ける大學生活の經驗を通じ、十二分私の期待に添ふものゝあつたことを證言してゐる。外國人のしかも盲人である私に對する大學當局者と諸教授の態度は、更に友誼に富んだものであつた。補助者として妻が教室に這入る事を許されたばかりでなく試驗其の他の取扱ひに於ても、行き屆いた親切に滿ちてゐる。大學の廊下で行き違ふ學生の誰れ彼れも、手厚い挨拶を交して行く。階段の上り下り一つにも、多くの親切な手が私を待つてゐて吳れた。先學年のコースには、グリヤーソン博士の英文學史にケンブ、スミス博士の哲學、其れにパターソン博士の宗教哲學をとつた。日本にゐる友人オーストロム博士より、前記ケンブ、スミス及びパターソンの兩博士へ、細々と手の屆いた紹介狀を持參した私は、其の兩家族より豫想もしない厚遇を受ける幸ひを持つた。此の兩博士の學界に於ける地位は申す迄もないが、其の家庭や講堂に於ける接觸を通じて受ける、高潔な人格的感化に私は一增引きつけられる。私は歸朝の曉此れ等の教授を通じて得た學說や思索を、同胞の前に紹介する日のあることを思ひ、心窃に其の機會を待つてゐる。大學の學友にも、ブライオン、(アメリカの人)スコット、マンソン氏等の親身も及ばぬ心の理解者が出來た。其れ等の學友は、多くの時間を割いて、參考書を私に讀んで吳れた。其の暖かな友誼を、私は此の機會に厚く感謝する。

私はかなり長く書いて來た。今はもう擱筆の折である。私は有りのまゝに僞りもなく、心に阻來した印象を筆にしたばかりで、或は其の有りのまゝな告白が、却て讀者の豫想を裏切りはすまいかと云ふ樣な懸念も微に感じられるが、凡て印象を其のまゝに傳へ樣とする爲の忠實さが、然らしめたとして寛恕に預りたい。特に諸友人の名前を其のまゝことわりも無く書き記したに就ては、禮を缺いた處もあらうが、此れまた私の止み難き感謝と尊敬の念より出でたる結果として、寛過されん事を切望する次第である。最後に私は一つの譬喩を以て此の文を終らう。日本でも東北人は、素朴剛健、しかも其の内に暖い人間味を持つてゐるとしてよく『栗』と云ふ綽名を附けられる。あの刺々しい中に、優しい風情を見せてゐる『薊』に象徴されたスコットランドも、日本の東北の其れと相類似する要素の多いことを發見する。栗の甘い實を食はうとすれば、先づ痛い毬を取り去らねばならない。其處に云ひがたない面白味がある。かうして私は、よくスコットランドの人を栗に譬へて妻と笑ふのであるが、エヂンバラの生活がます〳〵深く土地の人々と接觸するに伴れ、其の譬喩の誤りでないことを實感させられる。もうプリンセスの庭に、あの馨しい菊の花が咲き亂れるのも程近い昨年秋、當地に着いたばかりの我々が、あの美事な菊の花を見た時、何んと云ふ喜びを感じたことだらう。我々は再び故郷の土を蹈んだ時の樣な、云ひ知れぬ懷しさを覺えたものであつたが、又其の季節が廻つて來た。氣品と淸節を象徵した百花の王である此の菊は、正に日本の代表花の一つである『薊と菊』其處に結ぼれた一つのシンボルがある。其れは軈て『私とエヂンバラ』とを結び着けるシンボルであらねばならない。

（終り）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

溫習會を覗いて

八田かつ三

Aさん

東山が色づいて、鹿ヶ谷の秋も嘸美くしいことで御座いませう。若王子の紅葉位は送つて頂けるか知らと思つて、首を長くして待つてゐますが、線に故障があるのか、一向通じないやうで、宰府詣ででもすれば、當方から菅管公の愛でられた一ひらでもお目にかけるのですが、合憎紅葉狩にも誘はれませんので、まあ有合せの溫習會のぞ記でも御便り致しませう。

『人生はそれ自體が眞個のお芝居である。舞臺装置の必要もなく、自分が役者であると同時に觀客でもあり得る。毎日眞個のお芝居を樂しみ乍ら、わざ〳〵あの狹い桝の中で濁つた空氣を吸うて、觀劇料を出してまで、所謂お芝居をみるに及ばないぢやないか。』

何時とはなしに、斯んな考えになつて了て、所謂お芝居より、當面した人生に、はるかに興味を持ち出してからは、殆んど木戸なんかをくゞる事なしに、此の五年間を過しました。

處が過日は當博多口券の溫習會に、三日間を△△さんの男衆に早變りしたのです。△△さんといへば、唄にかけては天才的な咽喉を惠まれてゐる人で、天香さんや、金光教の高橋正雄さんなどが來られると、お座敷を斷つても聞きに

見える變り者、子供達の喜ぶ顏が嬉しいとて、小學校へ蓄音器を寄贈したり、時々養老院などへ手土産を持つて行つては、樂しみの少ない不幸なお爺さんや、お婆さんと半日話して來るのが、道樂と云へば道樂、一緒に托鉢に出掛けたことも二三度あつたりして、此度は見物旁々手傳つて下さらないかとのことで、臨時男衆が出來たわけです。

『御覽なさい、先日曹達を入れて洗濯したら、こんな手になつて了つた……お三どんになつたり、母さんになつたり、これからは藝妓さんです。若い時分と違つて、こんな時の外、お化粧なんかしませんから、道具なんかすつかり無くなつて了つて、白粉なんか一寸もつきませんわ。役者などは手拭一つでうまくつけますがね……。』

こんなことを云ひ乍ら、簡單に身じまひして△△さんは紋付を着始めました。

『この帶は今度揃えで造らせられたのです。變り者で通つてゐる私も、揃えとなれば遣らないわけにわゆかず、貧乏人は困ります。』

去年抱妓二人に逃げられて、千何百圓の借金を負はされ、水商買をしてゐる人とは思えないやうな世帶を、尋常六年になる息子さんと、お菓子屋の二階を借りてしてゐますが、左程氣もかけず。

『これもお蔭をうけてゐるので御座いませう。天香さんや正雄先生にお目にかゝつてゐなければ、くやむかも知れませんが……』と割合平氣に居られるのは、えらいと思ひます。

やがて仕度も整ひ、お辨當なども持つて、午後三時頃、△△さん親子と私、それに近所の娘さん二人もつれて、會場の大博劇場へ出掛けま

した。うどんやの暖簾をくゞると、左横に劇場への細い裏口がついてゐます。そこから樂屋へ參りました。

開演は四時からですが、もう長唄の老松に出る若い妓などが、衣裳つけに大騷ぎをして居ます。殺風景な樂屋に、脂粉の香と、華やかな色彩と、嬌めいた聲とが渦を卷いてゐるやうです。

さて私の今日申上げたいのは、當夜のプログラムではなし、見物後の感想なのです。

當夜、だん〳〵、油が乘つて來て、觀衆と舞臺の人、舞臺の人々とその藝術とが、ぴつたりと一つになつた三昧境に於て、私はあつと思ひました。

入園以來、あらゆる瞬間に於て、私は園生活劇中の人物となつてゐました。すべてのものが私に何等かの交涉を持つてゐたのです。私は起るから、寢るまで、千兩役者のやうな氣持で、おどつたり、はねたりしてゐました。だから全然違つた世界のお芝居(生活)の役者が拂つてゐる努力に對して、本當の理解が缺けてゐたやうです。勿論自分のお芝居(生活)に役たつことだけは、とり入れることに務めてゐたでせうが、自分の生活に關係なく、別個のものとして、その價値をはつきりとは認めてゐなかつたことに氣付きました。そしてそれが分つてみれば、如何やうなことにしても、一つのことを完成するために拂はれてゐる、涙ぐましい精神に對しては、道德的批判を超えて、頭が下ることを今更らのやうに思ひました。それは今までとても、一人前の左官やさんになるのにも十年はかゝるなどと云ふことを聞いては容易ぢやないなアとは思つて居りましたものの、その人が人知れず流した涙や汗を本當に感じてゐたとは、如何して云ひ切れませう。ほんの表つ面だけで、分つ

てゐるやうに思つてゐたので、此の度の見物のある瞬間に感じた、寧ろ悲壯なやうな感じを通してのみ、始めて本物にふれたのぢやないかと思つてゐます。お蔭さまで、これからわ人様の生活から、もつと〳〵攝取することの出來るやうになつたのを喜んで居ります。

次に考えは矢張り一燈園的になります。あれだけの一生懸命さでやつた後に何が殘るかと云ふこと、殘るのは借金だと云ふことです。溫習會にだけは如何やら收支も償ふかも知れませんが、個人には色んな無理がかゝつてゐます。その後仕末のために彼女達にふりかゝる事柄を思ふ時心は暗くなります。心も身も疲れ果て、得た名聲を抱いて、彼女達の苦しみは餘計に增すのですもの。勿論藝だけを主にしてみる時は、遠く長崎や、門司下關あたりから熱心に見物に來てゐる玄人筋にとつては、可成りに役立つでせうが、その役たつことから起る人生の種々相を思ひ合せれば、差引如何なることやら、私達はすぐに、あの眞劍さを何かプラスになる方に用ゐたら、大したものだがなアといつたやうな慾が起ります。

最後に、あれだけの人々が三日間小屋に集つて、樂しむために、どの位多くの人々の膏と汗とを搾取してゐるかを考えると、恩はずぞつとします。

私達は飽くまでも、つゝましさを失はないで、此の道を辿りませう。一切に仕え切ることを以て、自分の喜びと致しませう。纖弱い乍らも、持てるだけの重荷を負はせて貰つて、光の國へ進みたいものだと存じます。

溫習會を覗いて感じただけを書き連ねて、近況にかえます。御自愛の程祈りあげます。

（大正一五、一一、四）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

昔の日記（三）

みのる生

○八月四日
悔い改めて人の世の惡や悲しみのために祈るは、唯自分自身の生活を神に捧げ、自らの惡、罪に對して祈るより外はない。
○八月七日
休ませて頂く。
森川さん突然退園。理由は天香さん、當番に對して慊らぬ點、岡田さんの問題言ひ換へれば、古い者をきつて、誠實をもつて一燈園が進まぬ故。「一燈園に一燈園がないからだ。」
酒井さん八田さんと午後期待もせぬ松ヶ崎の大掃除にゆくことゝなる。高野川の川邊、撫子、野萩が咲いて美しさ言ひ難し。行く〳〵八田さんから、本多ひな子さん入園の動機、八田さんのこれまでの生活などきく。
三時頃、松ヶ崎に六人も集まることゝなり、私は具合が惡いので歸らして頂く。橋下に眠る。心持よく眠つた。風凉橋下流、おちつくこと限なし。
○八月十日
福知さんへと河道屋へとの三人を除いて全部御所の草取りにゆく。一燈園○光と書いた揃ひの檜笠に冷飯草履といふいでたちであつた。天香さん、宮崎安右衛門さん、中桐確太郎さん、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

春秋社の木村毅さん、横田さん、それに澁谷さんも加はられ、午食には十八の辨當が空になつた。

夜、天香さんと東京の御客さん達が園に來られた。

○八月十二日

カフエー、タワーと一休とで一日奉仕した。

○八月十三日

今日は午後二時頃から十一時近くまで、オペラ座で托鉢を試みる。不成功。よい機會があつたら托鉢すべき所ではあるが、まだその時でないらしい。祈りを殘して歸る。

○八月十四日

私は神様を信じます。又人間を信じます。人間とは魂の善美なる肉體の弱い被造物です。吾らは神の國を喘ぎ求め、その故郷を戀ふるお互の魂を信じ合ひ、弱き肉體の犯す罪をお互に赦し合ひたい。己が肉のことをもつて、隣人（神の子）の魂の道の躓きとしたくない。即ち吾には、神の國を來らしめん爲に、全體成就の前に障りとなることなしに生きたいものだ。懺悔下座はこの願と祈りである。

○八月十六日

反省日。大部分の時間を眠る。

他人の罪を審かず、他人の罪をわが罪としてあやまらねばならぬ。何が何でもいゝからあやまらう。

○八月十九日

精練工場行き。

魂の燈火が消えて淋しい。祈る。

法悅、安心を得んがための信仰であつてはならない。

宣光社は信仰と經濟との兩生活をうまく結びつけたものであらう。ヘブライズムとヘレニズ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ムとの調和の一端と之を見るわけには行くまいか。宣光社のことが知り度い。

○九月二十一日

銀閣寺で落葉を掃き薪を割る。

○九月二十二日

うるほひのある美しい生活を私は自由に建設して行かう。私は一燈園に囚はれたくないのだ。心情を餓ゑしむるに忍びないのだ。

美しい、優しい、信仰の生活、私の願はそれだ。

○九月三十日

御所の草かき。

私は今一燈園生活を信じてゐるか。天香さんを信じてゐるか。否である。私はたゞ忍びたい耐へたい。そして信仰の日の美しく來らんことをひたすら願ふ。

○十月九日（比叡山にて）

一燈園は安んじて妹を呼び得る所ではないと今日つく〴〵思つた。同時に一燈園は永く留るべき所ではない。天香さんは全くの僞物では決してない。同時に全く信頼し得る無我誠實の人でもない。

○十月十二日

正午比叡山より下る。

身をすてゝ信仰に進まねばならない。

私は身をすてゝ、私の周圍を愛しませう。身を捨てませう。身を傷け病みませう。死にませう。神を信じ隣人を愛して。

私は顧みて自分の心と行ひとが恥しい。家を捨てませう。學校をすてませう。明日をすてませう。今年一ぱい私は一燈園に歸つて、暫く木魚を叩くことにする。

○十月十三日

托鉢、丸山病院診察室。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

隣人の愛に徹するためには、自らは死ぬだけの覺悟がなくてはならない。愛の道は實に十字架の道である。

〇十月十五日

私は眞に愛想の盡きた卑しい、醜い、德のうすい、濕ひのない人間である。それを思ふと絕望したくなる。自殺したくなる。唯私のあらゆる力と思ひとを盡して神の國を來らせんことを祈るならば、凡てを捧げて神の深き犧牲となることを祈るならば、自分といふ者に死んで神と隣人との愛にひたすら生きんことを祈るならば、私は始めて美しく生き、喜びの中に生き得るであらう。愛に生きるのに何が要らう。無一物で結構である。食へる食へぬは問題でない。生きてゐる間を立派に過さう。

〇十月十七日

行き來の人すべてに愛を感じて、暖く親しい賑かな、いゝ心持だ。

〇十月十八日

今日も圖書館に托鉢。

此頃は毎日秋晴の空から、暖い小春の日の光が溢れこぼれていゝ氣持である。

〇十月十九日

今日も圖書館の托鉢。

ミケランヂエロとレオナルド、ダ、ビンチの繪のいゝ複製を買ふ。これ等の物を持つことが、どうか人々の躓きになりませんやうに。却つて私のこれを持つことを人々が喜ぶやうに所有し得ますやうに。人々に喜びを與へるこれらの繪の良き保管者たる立場を常に保たせ給へ。

〇十一月五日

托鉢、西田博士。

心がひどく動搖する。家へ歸つて一年ばかりじつとおちつき、其間にマンドリンでも習つて

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

土に親しい職業に呑氣に退きたく思ふ。札幌の農科大學にでも聘ばれて、六疊位の部屋を住居心地よくして此不安から逃れたい。信仰とか學問とか善とか惡とか言ふてゐるのが、せゝこましくて厭になつた。もつと寛かな懷しみのある、温い、小春日のやうな、ふわ〳〵した巢のやうな生活がありそうなものだ。そう思ふ。そう思ふ一方、又かうも思ふ。

辛棒しよう、辛棒しよう。こゝらが辛棒の仕處なのだらう。信仰の生活でなくては結局はおちつきはしまい。顧みよ。私は何をしてゐるか。學校をすてきらず、家をすてきらず、人を審いて其の日其の日を送つてゐるではないか。辛棒して一心に精通すべきであると。

だが天香さんに對する不信をどうしやう。美しい柔い美の生活と、清く嚴肅な信仰の生活と、私の心は二つの間を動搖する。

○十一月十四日、十五日
托鉢、家政女學校。

同じ死ぬなら道の爲めに死にたいものだ。

○十一月十六日——二十二日
托鉢、家政女學校。

與へられたる一隅にあつて、その一隅を祈り動かしたいものである。行く所是わが永遠の家、逢ふ人是神の賜ひし誠の兄弟、そういふ心境こそ願はしいものである。行く處は悉く神の家、共に歩むは是神の國の兄弟、これこそおちつきである。

驚くべきものは神から來る。神は賤しき者をして驚くべきものに變らしめ給ふ。

○十一月二十三日
旗日で圓山の一體に托鉢。屋根の落葉を掃き集めて燒く。草をむしる。
暖い晩秋の好日であつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

生存即ち罪障

松下吉衞

自分の不安わ、どこから來てゐるのだろうか。しずかに考えてみても、原因のすべてお、はつきりきわめることわ、できそうにないが、自分の生きることに向つて加えられるおびやかしが、その主な原因の一つであることだけわ、まちがいないようだ。

自分がこうして生きていることで、外の人にさわりおあたえていないだろうか、さわりおあたえられた人わ、きつと自分のことおうらんでいるにちがいない、このうらみが自分おおびやかすのだ。うらみわ、自分が現にふれて直接さわりおあたえた人からばかりでなく、自分の見も知らぬ人によつてつくられたさわりお受けている多くの人々からも、自分にむけられるものだ。このことお思うと自分わじつとしていられなく感ずる。

どうゆう生き方が、さわりがなかろう。

さわりのない生き方があるとして、自分のような道心の乏しいものに、果して行じきれるかどうか。

人口の増加わ、近年わが國において、特におびたゞしいが、生活資料の生産がこれにともなわないのか、それとも、人々の生きようとする欲望そのものが、強烈となり雑多となつたからか、原因わ何にしても、生きるのに難澁するものが、ます〳〵多くなり、争いあい奪いあいの氣風が社會にいよ〳〵つのりつゝあることわ、おゝうべからざる事實と思われるが、こうした現實の世相お前にして、自分の生きていく道お、まじめにたずねようとすると、ほとんど手も足もでないはめにおちいらざるお得ない。

道元禪師は、道を修する者の、さわりのない生き方として、山間の木の實、供養、行乞の三つによることお、示されているそうであるが、他人の山から落葉一籠さらつてきてもすぐ泥坊よばわりされる今の世の中に、所有主のない果實おひろつてその日〳〵の餌食にするなどゝゆうことわ、思いもよらないし、供養に生きるといつても自分のような一つの小善すら守りとおすことのできないものが、供養される浄財で生きられようなどとわ、現實にめざめた今、いかな慢心ものゝ自分でも考えることわできない。自分も、一燈園で、短かくない間、諸方の家々に奉仕して奴僕の役に服し、三度のものおありがたいとして生きた修行の經驗おもたないでわない。しかし、しずかに省るのに、自分の奉仕わどれだけ、さんげ報恩のまごゝろからなされたろうか、そこに修行者だとゆう自負心や自分の行によつて他お成就しようとの高あがりした氣持わなかつたろうか。けん命の勞苦おなしながらも名聞に心がうごかなかつたと、どうしていゝきれようか、ほんとうの救おいたゞけない苦しさに、修證不二な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

どと思いまぎらせ、自分お通宗教の自由人にひとりきめこんで、観念の魔術に甘い夢お見せられていたのでわないか。こうした自分に何で浄財の供養があろう。形式わ供養であつても、内容わ勞力の提供に對する報酬そのものに外ならないのでわないか。自分のありのまゝの姿お見れば、とても浄財生活など思いもよらない氣がする。それでわ、門べに立つて食お乞おうか。不信にして德のない自分にとつて、これわ、まことに相當した生き方と思われるが、實際問題としてあつかう時、山間の木の實の場合と同樣、妻子ぐるみ七人のものが、今の世に行乞してさわりなく生きていかれようとわ考えられないし、これおもつて、時代苦になやむ多くの人々にすゝめ得る生活樣式となすこともむずかしかろう。こう見きたれば、道元禪師教說の三種の食にはんで生きていくことわ、自分ごときに、とても及びがたき願といわなければならない。

それでわ、自らいつわらずかざらず器量相應な生き方として、どうゆう道おえらぶべきであろうか。明日のことわ知らず、今の自分としてわ、どうも、つゝましく生きて一生けん命にはたらかせてもらう、とゆうよりしかたがないように思う。こんな生き方で、人にさわりおつくらないなどゆうことわ、のぞまれようなく、從つて不安の根が切れないわけであるが、自分わ、今、これしかいゝ得ない。

自分の生きていくことで、どうしてもさわりがつくられていく。さわりお感ずる方にも罪があろうとも、自分わ、このどうしようもない事實に直面して、心のおのゝきお覺える。一日生きれば、一日

のさわりがあり、一年ながらえれば、それだけにさわりも加わる。生きたくないことのない自分わ、ふだんにつくるさわりに對してどうゆう罪のあがないおなすべきか。自分にわ、ざんげの仕方がはっきりわかっていない。心にわびるくらいのことわ、どうにかさせてもらえるとしても、これお生活にまで具體化しようとすると、ほとんど行きずまってしまう。今、自分につきまとっているやるせない不安わ、このことが何とか解決されないかぎり、とりのぞかれないだろう。

◇

いかに、物のうばいあいが、はげしいことよ。どこまで行ったら、やむことか。このうばいあいわ、物おいくら提供しても、やむものでわあるまい。社會政策、社會事業でいかず（その不必要おゆうのでわない。）社會革命が、たとえ、成就されようとも、それで、萬人の幸福と天下の平和が、もちきたされようとわ信ぜられないし（社會革命が實現されないとゆうのでわない）、詮ずるところ、宗教により、人々が永遠の生命にふれるのでなければ、問題わ長えに解決されないのでわなかろうか。

◇

天地の間に、一つのよりたのむものなし、寂寞のかぎり。涙にじみいず。

◇

『…………偖何より御案じ申上候は御大人様の御病氣に候。貴殿としては、歎異抄第四章

に、聖道の慈悲は物を憐み悲みはぐくむなり、然れども思ふが如く助け遂ぐること極めてあり難し、又今生に如何にいとおし不憐と思ふとも存知の如く助け難ければ此慈悲始終なしと有之候御心持と奉察候。而して此心中を察して飽迄悲憫したまふが大慈大悲に御座候。親鸞聖人略文類正信偈に

難行嶮路特悲憫　易行大道廣開示　應以恭敬心執持　稱名號疾得不退　信心淸淨即見佛

實に難行の行きつまりを特に悲憫したまふが即ち易行の大道に候。全體佛敎に難行道と易行道と二種ありと稱して二道並立の如く考ふるが誤りに候。唯一道に候。難行がゆけぬゆへに易行大道が開くるものに候。故に絕對唯一の無碍道に候。況んや自力も他力も一也、佛も神も一也は、あまり妥協も融通がつきすぎ候。其點を熟讀せざれば歎異抄の味は無之候。如何にも御父上の爲なれば、如何なる犧牲を拂ふも辭したまはざる御孝心なるべけれど、又如何なる犧牲にても助くる能はざる御心中こそ實に御同情に不堪候。之を飽迄悲憫したまふが如來の大悲に候。此如來の御憫愍をいたゞく一念が念佛に候。此一念の念佛は、自ら助かるのみならず、やがて親をも助くることの出來る末通りたる大慈悲なりといふが、第四章に候。此の如く一念に大慈悲心をいたゞきたまへども、眼前に御病氣の父上を御覽被遊候ては、身も心もたまらぬ御悲哀と奉存候。順次生にあらざれば、思ふ様には實現せざる次第に候。併此未來の還相回向の御利益を理想として、御同様に彼岸の涅槃界を仰ぐ次第に候。かくて永遠の靈境を仰ぐが爲に却て此穢土に安住するを得る次第に被存候。如何に信心開發すればとて、

矢張煩惱具足の凡夫たる以上は、此世にて覺を開くとか衆生濟度とか申すことは不可能に候。是即五章が標準となりたる第十五章の眞義に御座候。………………不肖も嘗て煩悶致候時、いかにも今迄致したることが何の益にもたゝぬ樣に存候時、亡者以上に殘念の思をなして却て世を呪ひ人を怨む心が起り、死んでも死にきれぬ亡者とも幽靈ともおばけともなりて迷ひ出づべき心持に候。雨月物語にある化者にあらねど、幾年にても同樣の事繰返さねばならぬ心持に候。此亡者此幽靈の不滿足不徹底往生しきれぬ心持を買込み被下て飽迄憐愍したまふが如來の選擇願心に候。即何れの行も及びがたき、地獄は必定棲家たる我々の爲に飽迄滿足せしめたまふが大慈大悲なりたゞ念佛なり。特に此亡者の成佛出來る迄御同情して下さるが如來に候。貴殿の如く多年に涉りて御修行被遊社會奉仕遊被候程一層人世には缺陷多きこと、樣々なること、歷々掌を見るが如くあらせられ候事と奉存候。而して其御不滿足を佛かねてしろしめて煩惱具足の凡夫と被仰候次第に候。不肖なる私が××氏の心を犯して迄申上候否見すく心に違ふことを知りながら申さずには居られなくなりて前後を顧みずして申上候事が偶然にも貴臺の現今の御心持に響き候事、是申せし私の力にもあらず畢竟佛かねてしろしめして貴臺の御心を御洞察被遊候かと唯不可思議の感を禁ずる不能次第に御座候。我計らひに人に念佛申させ候はゞこそ弟子にても候はめ、偏に彌陀の御催にあづかりて念佛申し候人を我弟子と申すこと極めたる荒凉の事なり。嗚呼佛かねてしろしめすことの歷々たるに驚き申候………………』

自分のようなものお、お心にかけさせられ、御寸暇もない御旅先より、こんなに叮嚀にお敎えくださるT先生に恭禮せずにわいられない。自分わ、幾度、この御手紙およみかえしたことか。

たゞ、性來の愚昧は、いたしかたないもので、うつし世のすべてに、あいそおつかせていながら、念佛にすがりきれないのだ。

佛のあるなし、こんな大問題が、どうして自分などにわかろう。何宗によつて、どうゆう修行おすれば、救われるかも、もとより、はつきりしているはずがない。

自分わ今困惑している。このまゝでわ、とてもたえられない。…………かまわず、目おつぶつて、あらたかな方によりすがる外ないとゆう氣になつている、そうもしなければ、とてもたえられないから。

——(十五年十二月)——

○本號表紙題字　佐藤一齋翁の筆蹟よりいたゞきました。

黎明のさゝやき

西田天香著　代價30錢

近代文化と一燈園生活

,,　,,

一燈園生活問答

松下吉衛著　代價15錢

時代苦を苦しむ

,,　代價20錢

クリスト教社會主義史

,,　代價32錢

社會問題と宗教

中桐確太郎著　近刊

購讀申込所

回光社

京都市烏丸頭下總町五

振替 大阪59839・東京57671

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

大正十二年十二月二十四日第三種郵便物認可毎月一回十五日發行
昭和元年十二月二十八日印刷納本　昭和元年十二月二十八日發行

「光」第六十輯　代價貳拾錢

ホルムス氏原著・谷口雅春氏譯

第一篇　忽四版

如何にせば運命を支配し得るか

四六版總洋布綴　三百數十頁　定價二圓

第二篇　最新刊

神と偕に生くる道

四六版背洋布綴　三百數十頁　定價二圓

譯者の三部作『神を審判く』はその第一部を出したのみで未だに第二部が出ない。それは氏の心境が既に『神を審判く』時代を去つたからである。氏は今自己を『神と偕に生くる道』に見出したのだ。此の心境の推移を語るものは此のホルムスの二名著の飜譯である。『それは譯書であるけれども自分のどの著書よりも自分の現在の心境に近い。自分は此の書によつて救はれ、又此の書によつて他を救はんがためにそれを譯したのである』と。

（本書の反響の1）

◇本書を手にせる日より一日として讀まざる日なく精讀八回つひに境遇を一變致候（兵庫縣六甲村、石田醫學士）

◇在來敎會と寺院とにのみ陣取れる宗敎を實際生活に體現せる眞に生きた宗敎と存候（横濱千草園、本田氏）

◇私たちの衰へひがんだ心にも大なる光が與へられます。數年前に此の書を手にせしならばと愚痴さへも起ります（廣島縣安佐郡、藤本氏）

第一篇發行所　東京京橋南紺屋町（振替東京三二六）　實業之日本社

第二篇發行所　東京市京橋尾張町（振替東京五五三）　警醒社書店

發行兼印刷人　京都市烏丸頭小山下總町五回光社內　西田保太郎
編輯人　東京府北豊島郡中新井村中新井一三六　松下吉衛
發行所　京都市烏丸頭小山下總町五番地　回光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN